

第11の岐路・師範への入学試験に落第

さて私は師範入学に際しても、一度落第したことである。おそらくは点数が足らなかったからであろう。というのは、私は総じて入学試験は不得意であって、このことは後の高師入学の際にも露呈した。高師の際には、後に説くように推薦入学方式によって、広島高師に入学したが、愛知師範の際には、さすがに日比の伯父が密かに模様を問い合わせてくれたところ、背も低く弱そうに見えたので落ちたのだから、失望せずに秋に受けるがよかろうとのことであった、が次の秋には無事合格となったが…当時三浦渡世平校長の考えで、4月に40名で二組を取る代わりに、春秋2回40名宛採用をされたのだが、その狙いは落第者の負担を半年に縮め、さらに春、秋により各々その特色を出そうとしたところ、私の見るところでは、どうも秋の合格生徒の方が特色があったようである。

同時にこの半年の失脚は、私にとってはそう深刻ではなかったが、しかし何ほどかの教訓とはなった。なお付言すれば前述のように、秋入学生の方が概して優秀であったため、入学後は秋入学生の方が巾を利かせ、特に私らの組は、後にも述べるように、空前の暴れん坊の多かった組であった。

第12の分岐点 愛知第一師範学校

私が小学校入学後入った学校が、中学ではなく師範学校であった事は、ほとんど運命的とも言うべきものがあったと言える。けだし我らの民族が、明治以後教師養成のために設けたものは、各県に師範学校を設け、あと多少遅れてその上に東京・広島の両高等師範を設立された。

戦後師範教育制度は一時批判的であったが、今や戦後のアメリカ方式の「新教育」の結果が深刻に露呈したことによって、ようやく心ある人々の間に、師範教育の反省の声が上り始めた。今や徐々にそれが兆しつつあるようだ。